

気分障害と認知症;アルツハイマー病を中心に

門 司 晃 (佐賀大学医学部精神医学講座)

本邦の現在の認知症者数は約 500 万人, その予備群と考えられる軽度認知障害 (MCI) は約 400 万人程度と推計されており, 今後認知症者数は 1000 万人を超える可能性もあるとされている. アルツハイマー病の初期症状に関しては, 物忘れが代表的であるが, 実際には気分障害の主要な症状でもある, 抑うつ, 不安, 意欲低下, 睡眠障害などの精神症状が前駆することもしばしばあり, それらはアルツハイマー病の早期診断にもつながる重要な所見である. これらの精神症状の病態生理の背景に β アミロイド病理があることを指摘する報告も存在する. 認知症の過半数を占めるアルツハイマー病は加齢に伴って発症リスクが高まり, 人口の高齢化に従って, その患者数は激増の一途をたどると考えられる. 一方で, アルツハイマー病の根本治療薬の開発が足踏み状態であることは今や広く知られている. したがって, アルツハイマー病予防のための様々な研究が近年盛んに行われており, 気分障害全体が認知症, 特にアルツハイマー病のリスク因子となることが繰り返し報告されている. 本邦では気分障害 (うつ病・双極性障害) の患者数は特に壮年期の男性・女性及び 60 歳以上の女性を中心として, 患者数及び患者の割合が近年大きく増加・上昇していることが報告されている. Livingston らが 2017 年に Lancet 誌に報告し

た認知症予防のために重要な九つの因子のなかにうつ病がとりあげられているが, その他の因子で重要視されているのが糖尿病であり, アルツハイマー病を 3 型糖尿病と表現する研究者もいる. 興味深いことに気分障害と糖尿病は双方向性に合併しやすく, 糖尿病の原因となりやすい肥満がうつ病とは双方向性の関係があることも指摘されている. 前述の認知症予防のための因子のなかには, 糖尿病以外に肥満, 高血圧, 運動不足などのメタボリック症候群に関係する因子が複数含まれている. メタボリック症候群が“慢性炎症”と深く関係することは従来から指摘されているが, 最近の研究では気分障害に限らず広く精神疾患一般における免疫系, 特に“慢性炎症”の関与の重要性が指摘されている. アルツハイマー病のような神経変性疾患における“慢性炎症”の関与は従来から指摘されており, “慢性炎症”のメカニズムが, 気分障害と糖尿病のような生活習慣病と認知症の三者の共通病態である可能性も考えられる. 以上をまとめると, 気分障害と認知症, 特にアルツハイマー病とは色々な側面で深いつながりがあることがわかる. 当日の講演では関連する重要な知見および我々の研究成果を一部紹介しながら, これらの点に関して論じてみたい.